

ユーカリの葉のごとく…

防府市立牟礼中学校 教諭 田中 紀子

(平成13年度派遣 オーストラリア シドニー日本人学校)

この度、原稿執筆のお誘いをいただき、当時自分が書いた拙稿を読み返してみました。

スクラムハーフ

田中 紀子

今年、オーストラリアでラグビーのワールドカップが行われました。同僚ともに、2試合ほど見に行く機会をえました。試合を見るまでは、私にとってラグビーとは、日本で「スクールウォーズ」というテレビドラマで話題となったスポーツくらいに認識しかありませんでした。未だにルールはよくわかりませんが、どうも十五人の役割分担がとてもはっきりしているスポーツのようです。スクラムを組んだり、ボールを受け取ってトライするフォワード、相手の攻撃を一身で受け止めてトライを防ぐバックス、得点後や相手チームの反則後にゴールキックをするゴールキッカー、そして、私がとても感銘をうけたのはスクラムハーフという立場にある人でした。この人は、決して自らゴールを決めることはできません。相手チームの動きを見て、ゴールできるタイミングを瞬時に判断し、どこに転がるともわからない楕円形のボールを、一番信頼できるフォワードのメンバーにパスするのです。このパスが正確に決まると、十中八九、トライが決まります。

私も、音楽教師として「スクラムハーフ」でありたいと思うようになりました。私には子どもたちに伝えたい音楽があります。その「思いり音」を、子どもたちにパスして、私ではなく子どもたちに「トライ演奏」させ、その喜びを共有できれば、これにこした喜びはありません。

ナイトパフォーマンスで子どもたちが渾身の力をこめて謳いあげた姿に、聴衆の皆様よりいただいた拍手喝采は、トライが決まった時の歓声拍手に、通じるものがあったような気がします。

これからも、ずっと子どもたちにパスを送り続け、たくさんのトライを決めたいです。

『ユーカリ NO.33 シドニー日本人学校文集』

すでに帰国して20年近く経過しておりますが、当時、自分が海外で生活してみて素直に感じた気持ちを反芻し、改めて数々のなつかしいシーンが、走馬燈のように蘇りました。

オーストラリアといえば、コアラ。コアラの大好物といえば、ユーカリの葉。ユーカリには油脂成分がたっぷり含まれており、大地の乾燥したオーストラリアでは、落ちたユーカリの葉が腐らずに大量に積もり、燃えやすくなっています。これが日本でも報じられる大規模な山火事のもととなるのです。

しかし、ユーカリは数年後たくましく生き返ります。燃え残った灰を養分としてさらに大きく成長し、青々とした葉をまた茂らせます。私自身、あと数年となった教員生活、初心を忘れずに、ユーカリの葉のように色あせることなく、コロナにも負けず、子どもたちにパスを送り続けていきたいと思っています。

シドニーでの3年間の生活を振り返り、秀逸な思い出を2つ紹介します。

<ミックスレッスン>

当時、小学部では音楽、図工、体育の3教科は日本人学級とオーストラリアに国籍がある児童が通うインタークラスの合同で行うミックスレッスンでした。授業では、日本人は同じ曲を何度も繰り返し練習することに抵抗はありませんでしたが、インタークラスの児童は一度できたら繰り返し練習することを好まず、すぐに新しい曲をやりたいがる傾向がありました。そこで、日本の教科書に掲載されている日本の曲だけでなく、オーストラリアの子どもたちが好む英語の歌も取り入れ、歌に振り付けもしながら、両国の子どもたちが音楽をとおして、日常的に交流を深めることができていたように思います。



<オーストラリアといえば、ラグビー！！>

日本でも一昨年は、ラグビーのワールドカップが開催され、ONE TEAMの言葉に象徴されるように列島全体がひとつになって、日本選手の活躍に沸きました。2003年当時、シドニーでもワールドカップが開催されました。私も日本VSアメリカ、ワラビーズVSオールブラックスの試合を観戦し、世界トップクラスのプレーに酔いしれました。日本は、残念ながらアメリカに惜敗しましたが、ワラビーズは大方の予想を覆し、オールブラックスに勝利し、決勝戦に進みました。当時、スタジアムでオーストラリアでは第2の国歌として親しまれている「ウォルシング マチルダ」を大合唱した時の一体感は、今でもよく覚えています。

現在、コロナ禍の生活ではマスクが欠かせません。私は毎日、授業の合間に、マスクにユーカリの成分を含んだ消毒スプレーを吹きかけて使っています。つんと鼻にくるユーカリの香りは、殺菌効果以上に私の心を癒してくれるもので、これは遠くなつかしいオーストラリアの大地につながる郷愁の香りでもあります。

日本人学校では、休憩時間にはDutyといって子どもたちが遊ぶユーカリの茂る校庭で、安全を見守る当番がありました。赴任して間もない頃、幼稚部の子ども同士が口げんかをしていたところ、何を言っているのかわからずにとまどっていたら、「通訳してあげようか。」と笑顔で近寄ってきた園児がいました。自分のつたない英会話力も情けなかったのですが、くったくのない子どもたちの笑顔にはいつも元気づけられていました。英語には苦勞しましたが、多少語順が違っていても、相手の目を見て、伝えたい言葉を心をこめてつなげることができていたら、「No worries.」(大丈夫だよ。)のフレーズが、オーストラリアの人々から、いつも笑顔とともに返ってきていたような気がします。

校庭にしっかりと根をはり、高くそびえ立つユーカリの樹々は、きっと今も変わらず、シドニー日本人学校の子どもたちを見守ってくれていることでしょう。